

執筆者紹介

市山尚三 Ichiyama Shozo

一九六三年生まれ。東京国際映画祭プロデュース・ディレクター。映画プロデューサーとして、侯孝賢監督『フラワーズ・オブ・シャンハイ』、賈樟柯監督『プラットフォーム』『罪の手おわり』などを手がけた。

石坂健治 Ishizaka Kenji

一九六〇年生まれ。日本映画大学教授。映画史。『ドキュメンタリーの海へー記録映画作家・土本典昭との対話』(共著)、『アジア映画の森ー新世紀の映画地図』(共著)、『躍動する東南アジア映画ー多文化・越境・連帯』(共編著)

戴周杰 Dai Zhoujie

一九九三年生まれ。木下恵介記念館担当キュレーター。アートマネジメント、映画学。企

画展「Colorful Identity 木下恵介ネクタイコレクション」展」木下恵介記念館開館二〇周年記念特別展示「わたしと木下恵介の春夏秋冬」特別展示「木下恵介と戦場の固き約束」

藤森猛 Fujimori Takeshi

一九五七年生まれ。愛知大学現代中国学部准教授。現代中国芸術 学童保育論。『東方中国語辞典』(共著)

韓燕麗 Han Yanli

東京大学大学院総合文化研究科教授。映画史、表象文化論。『ナショナル・シネマの彼方にてー中国系移民の映画とナショナル・アイデンティティ』、『越境の映画史』 *Cultural Politics around East Asian Cinema: 1939-2018*

晏妮 An Ni

日本映画大学特任教授。映画史、映像学、表象文化論。『戦時日中映画交渉史』、『戦時下の映画ー日本・東アジア・ドイツ』(共編著)、『ポスト満洲映画論ー日中映画往還』(共編著)

陳智廷 Timmy Chih-Ting Chen

一九八五年生まれ。香港都会大学人文・語言翻訳学系文化研究助理教授、香港映画評論学会理事、香港広東語映画研究会会員。華語映画、アジア映画、映画音楽・音声研究。『The Disunity of Body and Soul: Border-Crossing Anxieties in the First Post-War Hong Kong Song-and-Dance Film *Portrait of Four Beauties*』、『Sampling Global Roundtables and Chinese Cinephile Communities in the Pandemic Era』(共著)、『Sonic Secrets as Counter-Surveillance in Wong Kar-wai's *In the Mood for Love*』

阿部範之 Abe Noriyuki

一九七三年生まれ。同志社大学グローバル地域文化学部教授。華語圏の映画。「馮小剛が映し出す主旋律の外の記憶」『戦場のレクイエム』、『唐山大地震』、『一九四二』、『芳華』をめぐって』、『二〇〇〇年代の台湾映画産業と魏德聖ー『ダブル・ビジョン』から『海角七号』までを中心に』、『二〇〇〇年代以降の台湾映画における中台市場への眼差しー金馬獎、文創、新型コロナを巡って』

陳 儒修 Ru Shou Chen

一九六一年生まれ。台湾国立政治大学廣播電視学系教授。台湾映画、映画理論、文化研究。『穿越幽暗境界—台湾電影百年思考』『盧米埃星系—未來電影的七個關鍵詞』『バザンへの回帰—『ドライブ・マイ・カー』における「ワーニャ伯父さん」』

陳 龔 Chen Yan

一九八八年生まれ。京都精華大学マンガ学部キャラクターデザインコース専任講師。「動漫」概念史、アニメーション史、IPビジネス、キャラクタービジネス。「中国最初のアニメーションと言われる『大鬧画室』の再検証」「走向下一个百年—2010-2019日本动画変革期回顧」*An Epymological Study of the Terms Dongman, Donghua, and Manhua*

平林宣和 Hirabayashi Norikazu

早稲田大学政治経済学術院教授。近現代中国舞台芸術史。『中国演劇史図鑑』(編訳)『近現代

代中国の芸能と社会—皮影戯・京劇・説唱』(編著)『京劇俳優の二十世紀』(共訳)

黄 英哲 Ko Eietsu

一九五六年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。台湾近現代史、台湾文学、中国現代文学。『民主化に挑んだ台湾—台湾性・日本性・中国性の競合と共生』(共編著)『From Taiwan's Literature to Taiwanese Literature: A Paradigm Shift in Japanese Translation』『反事実歴史小説—黄錦樹小説論』(共編)

河辺 一郎 Kawabe Ichiro

一九六〇年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。国連論、日本外交論。『国連と日本』『日本外交と外務省』『国連政策』『日本の外交は国民に何を隠しているのか』

川村亜樹 Kawamura Aki

愛知大学現代中国学部教授。現代アメリカ表象文化。『アメリカ映画史入門』(共著、近刊)『自然・風土・環境の英米文学』(共著)

『ブラック・ライブズ・スタディーズ—BLM運動を知る—一五のクリティカル・エッセイ』(共著)

翻訳者紹介

陳 奕汎 Chen Yi-fan

名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程院生。日本近現代文学、ジェンダー研究。『菜譜』にみる東アジアの交流—植民地台湾のフードスケープを広げる—(翻訳)『二八二三砲戦—下金門地区平民的疏遷—以新聞報導為中心的考察』(翻訳)

学会通信（二〇二三年四月～二〇二三年一〇月）

◎学会活動

愛知大学現代中国学会、愛知大学国際問題研究所、日本現代中国学会東海部会共催講演会

一〇月二八日「分断のなかの現代中国研究」山田辰雄氏（慶應義塾大学名誉教授）

◎学会員活動

小川典子

「日本の中等・高等教育機関で三言語（以上）を教えるー日本における多言語教育の実践」

（共著、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第一九号、二〇二三年五月）

金湛

「三農問題への対策をめぐる開発経済学の理論と中国の現実」（『東亜』六七三号、二〇二三年七月）

加治宏基

「二〇二二年の東アジア情勢」（『ブリタニカ国際年鑑二〇二三年版』ブリタニカ・ジャパ

ン、二〇二三年五月）

藤森 猛
「アニメ『アルプスの少女ハイジ』論」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第四八号、二〇二三年七月）

中国21 Vol.60 予告（24年3月刊行予定）

特集●中国現代思想（仮題）

文化大革命の終結後の中国では、西側の多種多様な思想潮流からの大きな影響を受けながら、二〇世紀前半の革命の歴史と中華人民共和国建国以来の経験を踏まえた独自の思想潮流が展開されてきた。すなわち、一九八〇年代の「文化熱」、一九九〇年代以降の自由主義と新左派の討論、今世紀に入ってからからの儒家思想の復興、カール・シュミットやレオ・シュトラウスの影響を受けた国家主義的思想、さらには、「天朝」意識にもとづく中国的な国際思想など、その時どきの中国の直面していた現実的課題と連動しながら、ダイナミックな思想の展開が見られてきた。

今日、「習近平新時代中国特色社会主義思想」が大々的に宣伝され、それには属さない、あるいはなじまない諸思潮の一部はすでに窒息状態にあるかに見える。しかし、二〇世紀中国の思想史を振り返れば、いったんは地表から消えたかに見える思想が、長い伏流期を経て新たに蘇ったケースは少なくない。本特集では超大国化する中国の将来を展望しつつ、現代中国に伏流している諸思潮を探索し、過去、現在および未来の中国を理解する手がかりとしたい。

【座談会】村田雄二郎ほか 【論説】王前、緒形康、賀照田、宋少鵬、陳純、中村元哉、福嶋亮大、李曉東ほか

編集後記——二〇二二年の春先から構想し、二〇二三年末にようやく出版となった。砂山幸雄先生のお取り計らいで、東京大学名誉教授の刈間文俊先生に相談に乗っていただき、韓燕麗先生はじめ、第一線で活躍される先生方を教えていただいた。また、刈間先生のご活動の一端を伺い、大変貴重な経験となった。晏妮先生にも面会させていただき、快く執筆をお引き受けいただいただけでなく、婁燁監督についてなど興味深いエピソードを伺い、石坂健治先生もご紹介いただき、市山尚三さまにインタビューする貴重な機会につなげていただいた。◇黄英哲先生は構想段階からずっと助けけてくださり、書評執筆とともに、阿部範之先生、陳智廷先生をご紹介いただき、台湾、香港の映画祭に関して素晴らしい論説を執筆いただけた。そうしたなか、陳儒修先生が愛知大学で講演され、それをもとに特別寄稿していただき、台湾映画関係の議論に厚みが出た。薛鳴先生は、陳儒修先生への取次ぎや中国語原稿の翻訳者を探す際に力添えいただいた。◇陳翼先生の特別寄稿、平林宣和先生にお願いただいた書評も大変勉強になった。時間が限られたなか、素晴らしい翻訳をしてくださった陳奕汎さんにも大変お世話になった。そして、今後の活躍が大いに期待される戴周杰さんのインタビューでの、藤森猛先生との浜松出張は良い思い出となった。◇本特集号の編集にあたり、映画祭の役割、価値の一つは、人と人を繋げる場の提供であることを再認識し、まさに、この機会がなければ決して叶わなかった先生方にお会いでき、研究者として大いに刺激を受けた。学会室の杉山満さんはじめ、お世話になったすべての方々に重ねて御礼申し上げます。(川村亜樹)

投稿原稿募集 新しい発想から現代中国をめぐる諸問題に切り込む、気鋭の論考を広く募集します。現代中国に関するテーマであればジャンルは問いません。むしろ、既存の学問のジャンルを打ち破るような斬新な発想を期待します。①未発表のものに限る ②論説、研究ノート、報告・ルポ、資料等=50枚程度、書評=20枚程度、エッセイ=10枚程度(400字詰原稿用紙換算) ③ワープロソフトで作成した原稿の打ち出し2部およびデジタルデータを提出。デジタルデータはeメールでの送信も可。

〈原稿送付先〉愛知大学現代中国学会 E-mail : china21@ml.aichi-u.ac.jp

投稿規程の詳細は現代中国学会までお問い合わせ下さい。採否は編集委員会の査読を経て決定し、採用にあたっては規定により薄謝を進呈します。なお、応募された原稿は採否にかかわらず返却いたしません。

中国21編集委員会

〔編集長〕河辺一郎 加治宏基 川村亜樹 砂山幸雄 薛鳴 松岡弘記

愛知大学現代中国学部 <http://www.aichi-u.ac.jp/college/chi.html>

中国21 Vol.59

特集 中国とハリウッド、
映画祭

2023年12月25日発行

ISBN 978-4-497-22321-0 C3074

編集	愛知大学現代中国学会 名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777 Tel. 052-564-6128 Fax. 052-564-6228
発行人	砂山幸雄
発売元	株式会社 東方書店 東京都千代田区神田神保町1-3 Tel. 03-3294-1001
制作印刷	株式会社 あるむ 名古屋市中区千代田3-1-12 Tel. 052-332-0861